初級

昔の「桃太郎」を読んでみよう！①

問題1

Aの図はある桃太郎の誕生の場面です。空欄のくずし字を読んでみよう。

昔々、あるところに子どもを授かりたい夫婦がいました。
御香宮神社でお願いをしたところ、
神功皇后が現れ、その夫婦に桃を手渡しました。
その桃を持ち帰ったところ……、

①＿＿ ②＿＿ ③＿＿

此	も	ゝ ①	し	ら	て ②	し	で	き	て、
さ	も	た	く	ま	し	き	男	子	と ③	り。

＊御香宮神社：京都市伏見区の神社。主祭神は神功皇后。
＊「ゝ」：「踊り字」と呼び、前の文字をくり返すときに使用します。

問題2

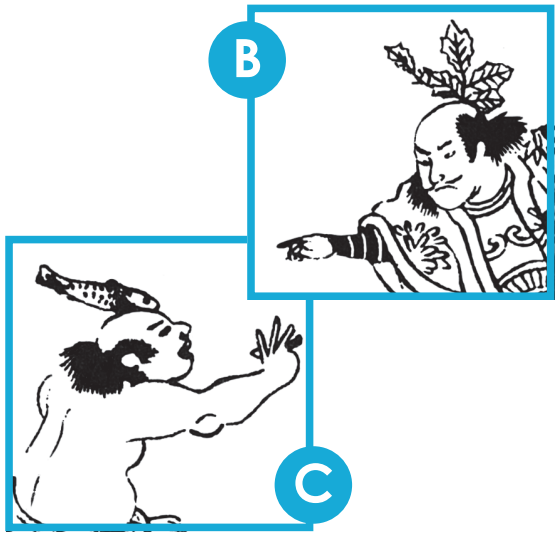
B・Cの図は桃太郎の仲間です。空欄を埋めて名前を読んでみよう。

ある節分の夜、桃太郎の姉が鬼にさらわれてしまいます。姉を助けるため鬼退治にでかけた桃太郎が住吉大社にお参りしたところ、二人の仲間があらわれます。

④＿＿ ⑤＿＿

⑥＿＿

ひ	④	⑤	ぎ	の	せ	い
い	⑥	し	の	せ	い	



ヒント ちょんまげに注目！

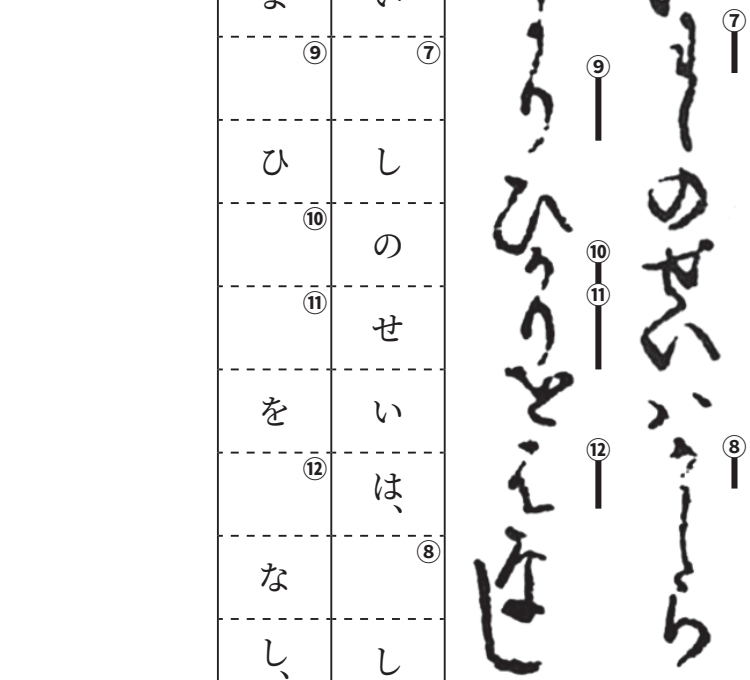
年　組　番
名前

点

問題3

Dの図を見て、空欄の字を埋めてみよう。

桃太郎とその仲間二人は鬼たちを退治します。
仲間の一人は右手で鬼を押しているように見えますが、
もう一人は……、



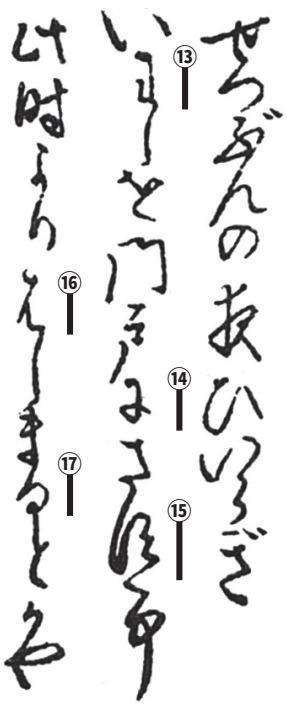
い	⑦
⑦	し
し	の
の	せ
せ	い
い	は、
は、	⑧
⑧	し
し	ら
ら	⑨
⑨	ひ
ひ	⑩
⑩	⑪
⑪	を
を	⑫
⑫	な
な	し、
し、	よ

ヒント
右側の男のちょんまげからは何が出てる？

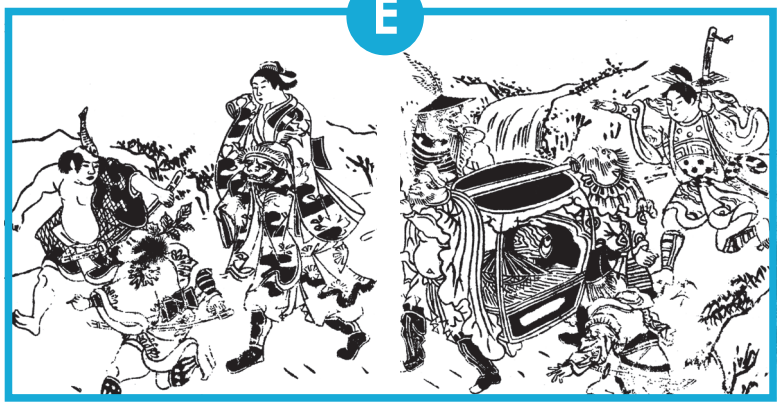
問題4

Eの図を見て、空欄の字を埋めてみよう。

降参した鬼は、宝物と一緒に、姉を肩車で送り届けました。
物語の最後には、日本のある風習の起源について記されます。



せ	⑬	此
つ	し	時
ぶ	を	よ
ん	門	り
の	戸	⑯
夜	⑭	じ
ひ	さ	⑰
い	⑮	と
ら	事、	か
ぎ	い	や。



年 組 番 名前

点

解答

問題1：①か（可）、②あ（阿）、③な（奈）。
「この桃、頭・手足できて、さもたくましき男子となり」（この桃は頭・手足が現れて、いかにも立派な男の子となった。）

問題2：④い（以）、⑤ら（良）、⑥わ（王）。
B「柊の精」C「鰯の精」

問題3：⑦わ（王）、⑧か（可）、⑨り（利）、⑩か（可）、⑪り（利）、⑫は（者）。
「鰯の精は、頭より光を放し、」（鰯の精は、頭から光を放って、）

問題4：⑬わ（王）、⑭に（爾・尓）、⑮す（須）、⑯は（者）、⑰る（留）。
「節分の夜、柊鰯を門戸にさす事、この（此）時より始まるとかや」（節分の夜、柊鰯を家の出入口に挿すことは、この時から始まったのだとか。）

教材について

ねらい：くずし字を学びながら、江戸時代の桃太郎の二次創作を読むことで、古典に親しむ。

時間配分：35分。授業時間：5分（くずし字の説明）、15分（問題1・2）、15分（問題3・4）。

対象教科：国語、社会、書写・書道

問題解説

この教材は、江戸時代に上方（京都・大阪）で出版された桃太郎です。有名な昔話ですが、この桃太郎のあらすじは、現代のものとは随分異なります。それもそのはず、これは桃太郎を脚色した作品なのです。桃太郎は確かに登場し、仲間と一緒に鬼退治をしますが、ユニークな設定や内容に変更されています。そのため、古典を苦手に思っている方にも、楽しんでもらえるのではないかと思います。

問題1 舞台は京伏見。桃山近辺に住んでいた夫婦には娘が一人いましたが、男の子を授かりたいと思い、御香宮神社に祈念します。すると、祭神の神功皇后が現れて、大きな桃を一つ夫婦に授けます。夫婦が持ち帰ると、その桃に驚くような変化が起きます。

問題1は桃太郎の誕生場面からの出題ですが、答えは**「この桃、頭・手足できて、さもたくましき男子となり」**です。なんと、桃から頭と手足が現れて、男の子になったというのです。図Aの中央にいるのがその桃太郎です。桃太郎の誕生には、桃を食べて若返った夫婦の間に子どもが生まれる「回春型」と、桃のなかから子どもが生まれる「果生型」とがあります。これも「果生型」に分類はできますが、桃自体が男の子になるという面白い設定になっています。

①は**「か（可）」**、よく出てくる字です。②は**「あ（阿）」**ですが、旁が①と同じ「可」ですね。③は現代の字と字母（仮名の元になった漢字）が同じ**「な（奈）」**です。

問題2 桃太郎と名付けられた男児は一年で一〇年分ほど成長します。ある節分の夜、夫婦と桃太郎が恵方の神の参拝に出かけたところ、豆を拾って食べようとやってきた蓬莱の島の鬼に、桃太郎の姉は一目惚れをされ、さらわれてしまいます。桃太郎は姉を助け出すため、鬼ヶ島へ出かけます。

鬼退治のお供といえば、猿・雉・犬ですが、**問題2**はこの桃太郎のお供を答えるものです。答えはB「**柊の精**」とC「**鰯の精**」です。図B・Cはお供の挿絵ですが、髷が葉と魚になっていることが、ヒントになるでしょう。桃太郎が神功皇后になって摂津国の住吉大明神（現・大阪市住吉区）に必勝を祈願すると、この二人が現れ、桃太郎を助太刀することになります。

なぜ、柊と鰯がお供なのか。それはこの「桃太郎」が狂言「節分」を踏まえていることが関係します。狂言「節分」は、夫が出雲大社へ大晦日の参籠へ出かけ、留守を守っている妻のところへ、蓬莱の島の鬼が節分の豆を拾って食べようとやってくるところから始まります。狂言「節分」で鬼が謡う小歌が、この「桃太郎」に引用され、桃太郎の姉の機嫌を取ろうと踊る鬼は、狂言「節分」で女の気を引こうとする鬼の姿そのものです。つまり、この「桃太郎」は、従来の桃太郎の話に、狂言「節分」を掛け合わせたうえで、さらにオリジナルの脚色を施しているのです。節分には、写真のような「柊鰯」と呼ばれる焼いた鰯の頭と柊を戸口に指す魔除けの風習が今も伝わりますが、そこからこの「桃太郎」では、お供が柊と鰯となっているのです。なお、「柊鰯」

は狂言「節分」にも登場します。

④は**「い（以）」**、⑤は**「ら（良）」**ですが、いずれも現代の字と字母が同じです。⑥は**「わ（王）」**ですが、「は（者）」と似ているので注意をしましょう。

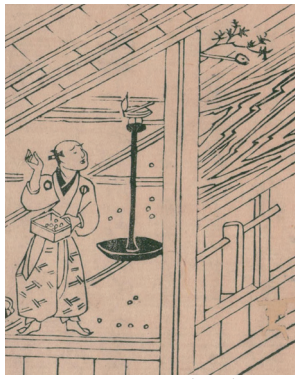
問題3　柊と鰯の精をお供に、桃太郎は鬼ヶ島へと乗り込みます。お供の活躍もあって、鬼の手下たちは皆降参をします。桃太郎は鬼の大将と力くらべで勝負をしますが、すべて桃太郎の勝利となります。

問題3は鰯の戦い方からの出題です。柊の精は、固くてトゲトゲした柊の葉っぱを手裏剣のように投げつけていますが、鰯の精とタッグを組んで戦っています。答えは**「鰯の精は、頭より光を放し」**です。鰯は頭から光を放っているのです。熱光線ではなく、強い光を当て、鬼が立ちくらんでいるところへ、柊が葉っぱで目口鼻をつくという戦法です。死者がでない比較的穏やかな戦い方と言えるでしょう。では、なぜ鰯は光を放っているのでしょうか。それは、鰯が寿司屋で「光り物」と呼ばれるように、青白く光る魚であることから連想されたのだと考えられます。

⑦は**「わ（王）」**。⑧と⑩は**「か（可）」**ですが、①⑥の復習問題ですね。⑨と⑪は**「り（利）」**です。⑫は**「は（者）」**で、**「え（衣）」**や**「み（三）」**と間違えやすいので注意が必要です。

問題4　鬼の大将は力くらべをする際、もし自分が負けたら、桃太郎の姉だけでなく、鬼の宝物である、身につけると姿を隠せる「隠れ笠・隠れ蓑」や、思いのままに何でも出せる「打出の小槌」を差し出すと約束をしていました。取り決め通り、桃太郎は鬼からそれらの宝物を受け取ります。鬼の大将は姉を肩車し、鬼の家来らは宝物を輿に乗せ、桃太郎の国元へ送り届けるのです。図Eは国へ帰る桃太郎一行の様子が描かれています。なお、隠れ笠・隠れ蓑・打出小槌は、狂言「節分」で鬼が女に渡した宝物でもあります。

物語の最後には、日本のある風習の起源について記されていますが、**問題4**はそれを問うものです。答えは**「節分の夜、柊鰯を門戸にさす事、この時より始まるとかや」**です。節分の夜に、柊鰯を家の出入口に挿すことは、この時から始まったらしいと記しています。もちろんこれはフィクションですが、節分の夜には、図版（『案内者』寛文二年〈一六六二〉刊）のように、家の出入口に柊鰯を挿し、豆撒きがされていました。このように節分と柊・鰯は関係が深いのです。鰯の頭のようにつまらないものも、それを信仰する人には大事であるという意味で使われる、「鰯の頭も信心から」ということわざがありますが、これは節分の風習から生まれたことを実感することができます。



戸口に挿された柊鰯（右上）
国立国会図書館蔵『案内者』
DOI：10.11501/255419

⑬**「わ（王）」**は復習、⑭**「に（爾・尓）」**は頻出の字、⑮**「す（須）」**は「つ（徒）」と似ているので注意が必要です。また、⑯**「は（者）」**も復習です。⑰**「る（留）」**は、「か（可）」や「な（奈）」と似ているので、気をつけましょう。

このように、くずし字や和本を用いることで、古典文学とは教科書に載っているものだけではないことを学ぶことができます。また、いつの時代も魅力的な作品は新たな作品を生み出すことも感じられるでしょう。この桃太郎は、古典文学の豊かさや楽しさを学ぶことができる、ユニークな古典教材の一つと言えます。

教材解説

底本は国立国会図書館所蔵『絵本集艸』（請求番号181-64）。本資料はさまざまな草双紙（江戸時代の絵本の総称）を文字通り集めた絵本の叢書です。この「桃太郎」もその一部です。底本は「大惣」と呼ばれる江戸時代を代表する貸本屋である大野屋惣八の旧蔵本でもあります。中野三敏・肥田皓三編『近世子どもの絵本集上方篇』（岩波書店、一九八五年）に影印と翻刻が収められていますので、全文はそちらでご確認ください。

なお、本教材を使用した授業実践報告の詳細は、加藤直志・加藤弓枝・三宅宏幸「くずし字による古典教育の試み―日本近世文学会による出前授業」・同「くずし字による古典教育の試み⑸―江戸時代の「桃太郎」を読む・補遺」（参考文献一覧参照）をご覧ください。

（担当：加藤直志・加藤弓枝・三宅宏幸）